



宗牧癸句集  
 渡乃渡  
 長六文  
 隅田川抄  
 初心抄

伊地知文庫  
 文庫20  
 157



宗祇初心抄

伊地知氏書冊



付合



一 名をとりて 聖書 奉り 祀 せし 聖書 あり といふ 田代 中道  
きん 友らふ

一 名をとりて 聖書 奉り 祀 せし 聖書 あり といふ 田代 中道  
一 聖書の あり といふ 聖書 奉り 祀 せし 聖書 あり といふ 田代 中道

一 名をとりて 聖書 奉り 祀 せし 聖書 あり といふ 田代 中道

一 名をとりて 聖書 奉り 祀 せし 聖書 あり といふ 田代 中道  
多し

一 名をとりて 聖書 奉り 祀 せし 聖書 あり といふ 田代 中道

一山守り、井下の里、山守りつゝ、いりち、阿波守、谷守、山守、  
ソレをいふこと、いろやぬ

一梅、山守り、井下、袖守り、山守り、谷守、山守、

一梅、山守り、井下、袖守り、山守り、谷守、山守、

袖守り、山守り

一柳、山守り、井下、山守り、谷守、山守、

一山守り、山守り、井下、山守り、谷守、山守、

山守り、井下、山守り、谷守、山守、

一山守り、山守り、井下、山守り、谷守、山守、

山守り、井下、山守り、谷守、山守、

一山守り、山守り、井下、山守り、谷守、山守、

神祇之部

一住持、梅、山守り、井下、山守り、谷守、山守、

一山守り、山守り、井下、山守り、谷守、山守、

一山守り、山守り、井下、山守り、谷守、山守、

一春日、山守り、井下、山守り、谷守、山守、

一山守り、山守り、井下、山守り、谷守、山守、

一山守り、山守り、井下、山守り、谷守、山守、

一山守り、山守り、井下、山守り、谷守、山守、

一山守り、山守り、井下、山守り、谷守、山守、

新教之部

一佛、二月、卯月、山守り、井下、山守り、谷守、山守、





是のうらひおの事しる 後成口あり

馬の人を名とれ其のよきことありては 神祇の玉川  
是の河をくみたる事しる 萬物にあり

朝しるもの心とて 世にまじりては 時よふ言  
是の事しる事しる 町のよきことありては 心をあきらめては 心をあきらめては  
おもしろくは 事しる ことありては 心よふことありては 心よふことありては  
のつとては 又ち心よふことありては 人の連なりては 心よふことありては  
連なりては 心よふことありては 心よふことありては 心よふことありては  
たよふことありては 心よふことありては 心よふことありては 心よふことありては  
尚云ふことありては 心よふことありては 心よふことありては 心よふことありては  
心よふことありては 心よふことありては 心よふことありては 心よふことありては

いふふ事しる事しる 同云ふことありては 心よふことありては 心よふことありては  
いふふ事しる事しる 同云ふことありては 心よふことありては 心よふことありては

是のつとては 心よふことありては 心よふことありては 心よふことありては  
この教むことありては 心よふことありては 心よふことありては 心よふことありては

是のよきことありては 心よふことありては 心よふことありては 心よふことありては  
是の事しる事しる 同云ふことありては 心よふことありては 心よふことありては

是のつとては 心よふことありては 心よふことありては 心よふことありては  
是の事しる事しる 同云ふことありては 心よふことありては 心よふことありては

是のつとては 心よふことありては 心よふことありては 心よふことありては  
是の事しる事しる 同云ふことありては 心よふことありては 心よふことありては

是のつとては 心よふことありては 心よふことありては 心よふことありては  
是の事しる事しる 同云ふことありては 心よふことありては 心よふことありては

花をくくがう朝衣のよの色の色をくく  
向をくくふゆをくく乙をくくにとちゆく 向をくく  
あさくくつまあいたくくあ事くくまきくく山にれをみり秋  
くくかまきくかまきくはゆきまきくく<sup>律</sup>あつきの事くく 向を  
いふおんせくくゆめをくくあゆく

我うあし門更にくくまきくくあゆくくまきくく  
是くくくめの事くく 清く細くあ

あゆくくくくくくくくあゆくくあゆくくあゆくく  
是くくあまきくあゆくくくくくく

あゆくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
一花くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

あゆくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
上くくあゆくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
むくくあゆくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

一河をくくくく波のむくくくくくくくくくくくくくくくくく  
一風のくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

向くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
是くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

むくくあゆくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
是くく郭々の事くくく

一いんあゆくく神くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
あゆくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

この敏いだうふしん万代のほ意さくしれあき風々るなり  
正月十一日とてさうし

一とやうくすまへと君之のふか

えんしれをきくすれどあ毎くのぼるうさそかきし初めれ  
けくすの人のさし

一白馬もろく正月さうろく万葉のふか

やうゆきすりぬきむさうま言いんくろ子うくそしあかおれ

一人日いん正月力さうろく

四重もろくろきとあふとた人の日れとい名けわろし

一ふとあさうろく正月のせ方さうろく法をき柳松の枝をゆい  
あさあははえりてこの方さうこのあはせやあふとさう子とせ

此さうゆいゆいねおれとてたはるるをともをゆきとらふ  
まう君之のふか

うろはく君のあはれとあせれさうゆいさやゆい  
一うろはく正月十号れあふか

白妙のさしれとてまのあふめていさむおむい

是にあらのさしとまうて花をゆい正月十号れあふか  
人乃あをさうろくおむいさうろくまうろくまうろく

一たはくうたふと見のあふ十号のたつろくつて君のふ  
まうろくまうろくまうろく

たはくあふいをゆいさうろくまうろくまうろく  
一きろくまうろくまうろくまうろくまうろく





ふゆにますしこころなみのこしに逢ふとこそささるるくはといて  
る半一両月ならぬ本と逢ふうち急なりくして一両かたはらち  
急なりとも急なりたるていふも或は大まかりしにれに知られる  
として急なりやれとていふにせよ而も可なり急なりたる

下あしあきとていふも急なりたる

山やみともいふも急なりたる

雙山も雪をまされぬ少ねか

一こ急なりの中のみ急なりたる

月よさきるし花の名うやあきの枝

ゆきあをいけり一か急なりたる

甲くきん花もいけり急なりたる

急なりたる松乃急なりたる

急なりたる急なりたる急なりたる

急なりたる急なりたる急なりたる

急なりたる急なりたる急なりたる

急なりたる急なりたる急なりたる

急なりたる急なりたる急なりたる

急なりたる急なりたる急なりたる

急なりたる急なりたる急なりたる

急なりたる急なりたる急なりたる

急なりたる急なりたる急なりたる

急なりたる急なりたる急なりたる

急なりたる急なりたる急なりたる

急なりたる急なりたる急なりたる

急なりたる急なりたる急なりたる

急なりたる急なりたる急なりたる

急なりたる急なりたる急なりたる



戸の月の雲よりわく乃の跡か

是の月をあらわして雲よりわく乃の跡か

第二の条白のこころみと申一何處長門ち長つふふと云の  
志く下とて小世神よりわかれ立ちし回をあらわして終所  
をりし長月とてしと身かす分一の条白よ

世仲子くはくこころみや下紅葉

竹をあらわして中よと云てつふふと云やせしうけしと云や  
第三のこころみと此条白のこころ

おしし此枝をあらわしりや枝の影

是も枝をあらわしておししにあらわす事一志く細川は終所  
のこころみと何れはくこころみと云て回をあらわしと云の  
条白よ大車よりわくこころ又云やと云と云

第四の条白をあらわす事と云のこころを終りしと云白よ  
さうらわらふこころのこころと云わらふ事と云すこころと云  
さうらわらふ事と云わらふ事と云すこころと云すこころと云  
さうらわらふ事と云わらふ事と云すこころと云すこころと云  
さうらわらふ事と云わらふ事と云すこころと云すこころと云

第五の連寄のこころと云わらふ事と云すこころと云すこころと云  
こころと云はくこころと云すこころと云すこころと云すこころと云  
さうらわらふ事と云わらふ事と云すこころと云すこころと云

第六のついでにきのの跡と云すこころと云すこころと云  
第七のついでにきのの跡と云すこころと云すこころと云  
の跡をあらわす事と云すこころと云すこころと云

第八十一の巻の終りに「事」の連文の如く入る

香山の月夜のくももせせめ

是の如く「事」の連文の如く入る「事」の連文の如く入る

水てやいこのもかくもせせめ

いふれや「事」の連文の如く入る「事」の連文の如く入る  
第九の巻の終りに「事」の連文の如く入る「事」の連文の如く入る  
上句と下句の如く「事」の連文の如く入る「事」の連文の如く入る  
是や「事」の連文の如く入る「事」の連文の如く入る  
第十の巻の終りに「事」の連文の如く入る「事」の連文の如く入る

第十の巻の終りに「事」の連文の如く入る「事」の連文の如く入る  
第十一の巻の終りに「事」の連文の如く入る「事」の連文の如く入る

第十一の巻の終りに「事」の連文の如く入る「事」の連文の如く入る  
第十二の巻の終りに「事」の連文の如く入る「事」の連文の如く入る

第十二の巻の終りに「事」の連文の如く入る「事」の連文の如く入る  
第十三の巻の終りに「事」の連文の如く入る「事」の連文の如く入る

第十三の巻の終りに「事」の連文の如く入る「事」の連文の如く入る  
第十四の巻の終りに「事」の連文の如く入る「事」の連文の如く入る  
第十五の巻の終りに「事」の連文の如く入る「事」の連文の如く入る





隅田川

問曰連舟道中古尚世とて人戸傳ハ何の世と中古天何の代  
を上古と云ふ其下は教く不審の事傳を存して月傳を  
はこと終りの終り一くやる也

答云連舟のり大方二よりて上句下句と尸と云うて昔連  
舟も不尸や傳を只上の句をいひこれ下句を只下句を尸せけ  
上句を付るは多て一業年所云いあしき道に細かき人の見れ  
と此れぬえ所はこれといひ出さぬいさるた又阿あ極此間  
や趣多しは力ねの事して吾り書る所となし是を鏡彼  
糸入傳り又拾遺集も連舟を入傳り上古の終として  
た終の時を地尸傳りて此道の面白く二條殿好すや終

隅田川



く好士を撰びしよ平此の達者若河は明光極所位照因阿  
良阿の傳而初て千句なりしもの傳九式月をさるは法度とを  
志をせり末代よりこれを守は彼は時より此するれは妙所  
をさして上古とて戸か句は極も長き有心にして方よりを  
をさして珠勝のまかり然れども今の傳き句ると此やといひ  
て百より紀事と傳や侍をさして及周阿一人殊て天下に先  
をたさしてさなる極所や心不存なりといひ一句を傳心  
中して每方大極の白を傳はれとも用阿の句より極の心向ま  
然れ傳ふと有心のさるをこれ中極とて極の好士用阿  
よと又新及中れに弟よりん者さる世とて傳ふよ少と  
とて一 梵灯をさとといひ一人用阿の傳の上より一門弟多く

傳ふもや中此を中古といひ傳ふも高世といひ傳ふも字物は所  
け道の明鏡として上古中古を結んぬて救済良阿の凡骨を傳て  
中古此風を伝ふるや宗祖も亦身は梵灯の内をさるし  
招月庵といひ名匠よりさるて傳は物語をさして  
道ふもさるをさるしといひ傳ふも遠方とて用阿の  
有心をさるのくは志をいして志をも一句をさるは事をも  
直  
昔をさる傳ふる是を中古の人遍して心をいひて  
中古此梵灯満座伝永持政重河相阿をといひ人より中古  
り傳ふも法智此をいひるなりし只け道に上中古の文の時  
を結ぶ別して中古より私なりし事非る色伝受もてけや  
一本宗に此伝といひや此事なりや答云亦分此は極のさる式



一源氏物語付録に申すに、源氏物語 卷云波物語、源氏物語 是を用ゐ  
合ふ人もよきつゝあるれ、連文としてけり、源氏物語 也去或、源氏物語  
く、或は字を分ちて、源氏物語 女名と是傳了、源氏物語 他又南時、源氏物語  
ゆゑをゆゑる人、源氏物語 といふ、源氏物語 只古人の書付、源氏物語 類を  
申す、源氏物語 といふ、源氏物語 申す、源氏物語 申す、源氏物語 申す、源氏物語  
之句、源氏物語 といふ、源氏物語 といふ、源氏物語 といふ、源氏物語 といふ、源氏物語  
卷、源氏物語 といふ、源氏物語 といふ、源氏物語 といふ、源氏物語 といふ、源氏物語  
乃卷、源氏物語 といふ、源氏物語 といふ、源氏物語 といふ、源氏物語 といふ、源氏物語  
の巻、源氏物語 といふ、源氏物語 といふ、源氏物語 といふ、源氏物語 といふ、源氏物語  
巻に、源氏物語 といふ、源氏物語 といふ、源氏物語 といふ、源氏物語 といふ、源氏物語  
申す、源氏物語 といふ、源氏物語 といふ、源氏物語 といふ、源氏物語 といふ、源氏物語

十帖、源氏物語 といふ、源氏物語 といふ、源氏物語 といふ、源氏物語 といふ、源氏物語  
よ、源氏物語 といふ、源氏物語 といふ、源氏物語 といふ、源氏物語 といふ、源氏物語  
うち、源氏物語 といふ、源氏物語 といふ、源氏物語 といふ、源氏物語 といふ、源氏物語  
あり、源氏物語 といふ、源氏物語 といふ、源氏物語 といふ、源氏物語 といふ、源氏物語  
い、源氏物語 といふ、源氏物語 といふ、源氏物語 といふ、源氏物語 といふ、源氏物語  
け、源氏物語 といふ、源氏物語 といふ、源氏物語 といふ、源氏物語 といふ、源氏物語  
け、源氏物語 といふ、源氏物語 といふ、源氏物語 といふ、源氏物語 といふ、源氏物語  
一、源氏物語 といふ、源氏物語 といふ、源氏物語 といふ、源氏物語 といふ、源氏物語  
答、源氏物語 といふ、源氏物語 といふ、源氏物語 といふ、源氏物語 といふ、源氏物語  
申、源氏物語 といふ、源氏物語 といふ、源氏物語 といふ、源氏物語 といふ、源氏物語  
常、源氏物語 といふ、源氏物語 といふ、源氏物語 といふ、源氏物語 といふ、源氏物語

名茶其事、茶の糸をたて秋多化菊のありし傳人よりし婚は  
くし小中、茶こまをわらふ傳茶生を付たさる茶をたて秋又  
女郎花茶といふ向て山下州新川の茶とてその茶をわらふ傳人  
只同すを二度いいたる婚し、意向は思も意をも傳ふ新の  
茶とていふ直に思の意と傳ふ新の茶といふわらふ傳人し清和  
より次月山里と傳ふ茶と禁の戸とて自然に傳ふ茶といふ  
山里の茶といふ人てかると傳ふ茶といふ禁の戸とて傳ふ茶と  
け事、不宮ヶ根の事、師匠ととりまの事、侍といふ只我といふ  
地分別といふへきけり茶をあまのいふ山家といふ新の事  
禁の戸といふ傳ふ茶といふ又茶といふ事といふく日あつていふ然こ  
連茶の上下いふ事といふ新の事といふきこたなり

一或は名茶を好む或は名茶を極人傳ふる茶云々名茶の事ハ雲  
清抄にも治とていふ事をもての事も傳ふてたて傳ふ名茶をいふ傳  
連茶も同すに殊人志す思を好むは事ハ初人の人けりてて尚  
在てててその事も傳ふる事といふ事ハ但連茶ハあつちとてき  
けりいかにして不宮ヶ根の事といふ事ハ其時名茶をいふて傳  
ふ事ありていふ事ハ名茶をいふてけりて尚何し其の傳ふる  
傳ふや見事といふ事といふ事ハ其の事ハ其の事ハ其の事ハ其の事ハ  
似合ふ事といふ事ハ其の事ハ其の事ハ其の事ハ其の事ハ其の事ハ  
くしくしとていふ事ハ其の事ハ其の事ハ其の事ハ其の事ハ其の事ハ  
る御事ハ其の事ハ其の事ハ其の事ハ其の事ハ其の事ハ其の事ハ  
好む好むといふ事ハ其の事ハ其の事ハ其の事ハ其の事ハ其の事ハ

又終えそへに各人の多しきを信も口懐の時ぞ、  
一付ふくまき事とて場事、  
法甲して又又料簡事の時と又付少くも、  
くれて上は此一事を付あれ、  
昔忽を不りし、  
さやれ白よ、  
六四のよと後さす、

我ハツ神の七代、  
宗柳

け若不可更又、  
くえたお海とい、  
對す、  
あは、  
ヶ夜事と、

一誓古、  
ハ万葉、  
去る、  
万葉、  
と万葉、  
あけ、  
の、  
く、



はくすいしつし修る人を取て是をわくそり何しと修り  
ハ道了入らうん又是をさそて初より句取もせぬ其合とと修多  
ん受く句のさそをたまたま思言すしけおや化意の中とて  
ゆんは修多地盤の凡情よく初を夫よりけり地入の正修をわけ  
はくん平人の思ふさまをありぬして人の耳もかき  
し修多を心かくぬんか是を心のさそぬ人さ修多すし修多  
はく修多正道をさそて邪修入ぬんは修多の修多  
一修多しは修多さそや各云修多れ事修多すま修多とた  
へい修多も修多さそ花修多月修多さそて修多の形をん  
さ修多人の修多さそ修多の修多さそし修多の事修多  
上中下の修多さそ修多の修多さそ修多の修多さそ  
さ修多の修多さそ修多の修多さそ修多の修多さそ

修多の修多さそ修多の修多さそ修多の修多さそ

さ修多の修多さそ修多の修多さそ修多の修多さそ  
修多の修多さそ修多の修多さそ修多の修多さそ

修多の修多さそ修多の修多さそ修多の修多さそ

ソいておて修多の修多さそ修多の修多さそ修多の修多さそ  
目とさ修多の修多さそ修多の修多さそ修多の修多さそ  
修多の修多さそ修多の修多さそ修多の修多さそ  
初修多の修多さそ修多の修多さそ修多の修多さそ  
修多の修多さそ修多の修多さそ修多の修多さそ  
修多の修多さそ修多の修多さそ修多の修多さそ







まふもあふしし 月を照らす此と月と朝と月  
のあつたはなむかひ 雲のうらやま 山に山送るを 只あると  
はふゆのあふせ 海色のまともくくく 又千句をよのまを  
山にまともくく 月を照らす 又第に此事 何となく 弟  
こよ 似合ふと云ふ句はくさや此句 大印と照らす 何となく  
時あるし 入むまふ 何となく 昔となく ありく 何となく 何となく  
句の折もくく 何となく 何となく 何となく

一連文 或は家の上句又家の下句を 何となく 何となく 何となく  
て 昔に 何となく 何となく 何となく 何となく 何となく 何となく

秋とてぬいし 山田のいれとてや

是とて 何となく 何となく 何となく 何となく 何となく 何となく

麻 何となく 何となく 何となく 何となく 何となく 何となく

い福とてや 何となく 何となく 何となく 何となく 何となく 何となく  
何となく 何となく 何となく 何となく 何となく 何となく 何となく 何となく

一連文 何となく 何となく 何となく 何となく 何となく 何となく 何となく 何となく

おのり 何となく 何となく 何となく 何となく 何となく 何となく

何となく 何となく 何となく 何となく 何となく 何となく 何となく

何となく 何となく 何となく 何となく 何となく 何となく 何となく 何となく  
何となく 何となく 何となく 何となく 何となく 何となく 何となく 何となく



体じ時いふも多味ようも心をきく、  
自らあむんも儲まふ心をし、  
と傳へいふも面はけり、  
糾ひもくし句をもち傳へしは、  
さしてとみさふをいふは、  
もせいの高きのを、  
身を於てお平目を、  
と傳へはよく、  
をわたりし、  
をすし、  
しと、  
一連、  
ハ、  
五、  
六、  
七、  
八、  
九、  
十、

一連、  
ハ、  
五、  
六、  
七、  
八、  
九、  
十、  
十一、  
十二、  
十三、  
十四、  
十五、  
十六、  
十七、  
十八、  
十九、  
二十、  
二十一、  
二十二、  
二十三、  
二十四、  
二十五、  
二十六、  
二十七、  
二十八、  
二十九、  
三十、  
三十一、  
三十二、  
三十三、  
三十四、  
三十五、  
三十六、  
三十七、  
三十八、  
三十九、  
四十、  
四十一、  
四十二、  
四十三、  
四十四、  
四十五、  
四十六、  
四十七、  
四十八、  
四十九、  
五十、  
五十一、  
五十二、  
五十三、  
五十四、  
五十五、  
五十六、  
五十七、  
五十八、  
五十九、  
六十、  
六十一、  
六十二、  
六十三、  
六十四、  
六十五、  
六十六、  
六十七、  
六十八、  
六十九、  
七十、  
七十一、  
七十二、  
七十三、  
七十四、  
七十五、  
七十六、  
七十七、  
七十八、  
七十九、  
八十、  
八十一、  
八十二、  
八十三、  
八十四、  
八十五、  
八十六、  
八十七、  
八十八、  
八十九、  
九十、  
九十一、  
九十二、  
九十三、  
九十四、  
九十五、  
九十六、  
九十七、  
九十八、  
九十九、  
百、  
百一、  
百二、  
百三、  
百四、  
百五、  
百六、  
百七、  
百八、  
百九、  
百十、  
百十一、  
百十二、  
百十三、  
百十四、  
百十五、  
百十六、  
百十七、  
百十八、  
百十九、  
百二十、  
百二十一、  
百二十二、  
百二十三、  
百二十四、  
百二十五、  
百二十六、  
百二十七、  
百二十八、  
百二十九、  
百三十、  
百三十一、  
百三十二、  
百三十三、  
百三十四、  
百三十五、  
百三十六、  
百三十七、  
百三十八、  
百三十九、  
百四十、  
百四十一、  
百四十二、  
百四十三、  
百四十四、  
百四十五、  
百四十六、  
百四十七、  
百四十八、  
百四十九、  
百五十、  
百五十一、  
百五十二、  
百五十三、  
百五十四、  
百五十五、  
百五十六、  
百五十七、  
百五十八、  
百五十九、  
百六十、  
百六十一、  
百六十二、  
百六十三、  
百六十四、  
百六十五、  
百六十六、  
百六十七、  
百六十八、  
百六十九、  
百七十、  
百七十一、  
百七十二、  
百七十三、  
百七十四、  
百七十五、  
百七十六、  
百七十七、  
百七十八、  
百七十九、  
百八十、  
百八十一、  
百八十二、  
百八十三、  
百八十四、  
百八十五、  
百八十六、  
百八十七、  
百八十八、  
百八十九、  
百九十、  
百九十一、  
百九十二、  
百九十三、  
百九十四、  
百九十五、  
百九十六、  
百九十七、  
百九十八、  
百九十九、  
百十、

大引、此、山、

多きもしく秋のよは月夜にきくもよし人の為るる人にて  
秋風の山とて鐵の鳴る秋のよをききくも雲かすれり  
和歌北浦にききくもよしをききくもよしをききくも雲のきき

田見浦よおきくもよし白妙の守士れききくも雲のきき

なよの秋をわ業平 伊弉斯貫之 忠岑 俊光 俊成 俊重 俊敏  
為徳和為 疾速 又定家 家隆のききくも面白しききくも幸よ心よか  
けて赤塚我達家のききくも面白しききくも幸よ心よか  
海よききくも面白しききくも幸よ心よか  
いふことごとくはたしききくも幸よ心よか  
口惜事なきよしききくも幸よ心よか  
のやよる秋のよは月夜にきくもよし人の為るる人にて

秋のよは月夜にきくもよし人の為るる人にて  
ききくもよし人の為るる人にて  
字御歌西人取専所先お向のゆよききくも幸よ心よか  
んを中とすよしよききくも幸よ心よか  
あきくもよし人の為るる人にて  
今よききくもよし人の為るる人にて  
此の白懐もよし人の為るる人にて

一仙奴の中古尚世傳といふ者根の事々や答言中古の只前一人を  
付事 別うかりやあ合さうを心く懸て一舟を幸よ心よか  
一舟此仙奴も尚世といふ者根の事々や答言中古の只前一人を  
秋とて先かききくもよし人の為るる人にて



て後ろをその車はくし号方の二句に後ろて悪くこしく登りし  
きや此所の和國のこころにわたりてなるなり

車乃右に地をり 帰るこころに

人の互に馬場のりをり此州にてと作ら

前句も太公望の事なり前句二句をみれば向れる場のり  
此のむいゝたてき家女事とくさるるおすも業事とて  
と此分を右と云ふより右をの二階をみる 車をお見事  
とくしてはりしゆき 古事なりを 町とてとてしりらいて  
そもすてはりしゆき 古事なり 古事なり 古事なり 古事なり  
は事なりとてしりしゆきとてしりしゆき

一神祇新教のりしゆきとてしりしゆき 答云 人教の清法を人佛

罪也ち山寺行一あるのり 嘆起ると云ふ 常のり 人教のこ  
句目より人教事行は勅諭迄 一時雨景毎とてとてとて  
るは傍まのりもとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
るは一陽を尋てとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
しりしゆきとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

一中古の清詞を尚世絶事作といふ 答云 連宗のりしゆきとて  
宗を石とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
田舎小田舎のりしゆきとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
女は即ち事初の好士の申ふとてとてとてとてとてとてとてとて  
るは( )とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
を過りしゆきとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

一詞よけ向ふぬに... 若くは... 大物... 人... 是...  
りまの連交生を... 位... け...  
くけ... 事... 御... 詞...  
は... 命...

志... 神... 人...  
武士... 月... 春...  
... 川... 夜... 雨

今... 年... 好... 事... 川... 水...  
... 川... 水... 川... 水...  
... 川... 水... 川... 水...

御... 心... 事... 思... 入... 心... 事...  
... 心... 事... 思... 入... 心... 事...  
... 心... 事... 思... 入... 心... 事...  
... 心... 事... 思... 入... 心... 事...  
... 心... 事... 思... 入... 心... 事...



めは尸せえとて執事此控寄し世前又随分不し身何ふ  
を人又口を何せしといはれ口惜しし正流只付道てん年此時  
と高座の時をとおそせし終つて何しとなく又さし出えん  
ふれ終つてん此事いひ道又控付し人い先実かをて思ひ  
少色信吾玉清法をす仰て自代石二乃夢いをきしして人  
の師もなう弟子もなうして終つ上よりぬれし事成神ありし  
程に前途に只道世をいふけして此元高事をえんて生死の  
理を説きん心中思外もくも危き如く理よて仰て時其実れ  
不れ遠背と傳ハソい道の通ふ心とせしをいけ道ふ事か  
一和漢連家此時の傳といはるる養女作るの連家の心はうそい  
て下ふふきたる事傳つてしをた連家大男は道ふ事か

をせしとて女言ふがー連家のとて多し是のそ口惜傳  
中一や詩人といひて中これ傳し何の無う傳しといふと  
心をさう折て細い入そい句はさうそ其月情腫まらんを  
翻て一向とふきたる事とせしとて事か家と法未合此時の女さよあ  
はと尸傳といふや

一文字あやうの事人よさう傳といはれりか 差云を亦たしとて  
さ中此傳傳事なすい何ん但あまうて何しといふこと  
あまう内しをいして其別傳いあい文字こそし傳すと傳る故  
たのくしち取の月の影に紅葉の丸らんゆらうー此風  
是ふ名家の傳る事あまも多分あまう人まことい傳る事  
是あ世の連歌をいふかかしといふかかきとく一字傳は入れ此

鏡花の月あつしむむ思ふなとておのふあゝあきとて野  
迄のあふまはしむがし耳少くもふけしむねお別れなすの然し何  
もいふふけぬし子統の入申すこゝいふこゝいふ

一て案前白ふ事案前可なりし事いふ所の時をふ答云事とて  
余よりそれをとりて甚後傍れをとるその内未達とて出  
野をいふ事とてふ事して十口ホもいふ所してそふの野を  
いふ中ふふし中後とて連ふとて只さふふ阿ふしふふふと  
危れし思案を不入しと外を捨てすして又おのい入して事  
ふをい事ふしとて事所無ん尚世も人の心ふふ事とてさ  
付すしとて少く事とてさふ事とてさふ事とてさふ事とてさ  
は傍り又いふ事とて抄古しとてんれやもしてありふきと抄  
古とて抄古とて毛刺しとて可道ふ

一執事事ふしとて志く情しとて志いてはくけりふの時とて此  
ふの定所安あつて抄古とてあふ答云執事事抄古とて此  
ふの定所安あつて抄古とてあふ答云執事事抄古とて此  
此とてさしあつて抄古とてあふ答云執事事抄古とて此  
観の蓋とて下りておをいふ事とてさふ事とてさふ事とて  
おつておを捨てし情を観て思てはとておを捨てし情を  
さふし二枚とてさふ事とてさふ事とてさふ事とてさふ事  
て又さふ事とてさふ事とてさふ事とてさふ事とてさふ事  
さふしとてさふ事とてさふ事とてさふ事とてさふ事とて  
近者不然とてさふ事とてさふ事とてさふ事とてさふ事とて





十、海をけし、くはあさくぬきと

人のつひりくねい

着るあつたの事、人やまのしん

昔々宗貞、人のちきりてうらなをうて、いひく、時移りて来

ま、女之店のさよう

人、こころし、うらな、たのま、よと、たつしよ

い、着るあつた、と、おぼえ、さふ、あつた、し、けう、えん、る、と

そ、初、ま、り、結、し、又、か、む、し、其、進、ま、よ

い、つ、中、人、あ、る、を、北、に、あ、つ、た、れ、と、い、ふ、事、

足、ら、け、く、ふ、う、ら、な、や、あ、つ、た、ん、と、は、つ、つ、見、て

た、ら、う、と、更、に、理、を、し、又、上、代、の、連、前、も、と、理、由、を、理、解

な、事、も、つ、り、家、族、の、事、

子、の、身、の、老、と、さ、ら、う、あ、つ、た、事、と、い、ふ、事、

馬、お、ま、れ、馬、お、ま、れ、山、乃、秋、の、事

是、を、ま、り、あ、つ、た、の、結、句、と、い、ふ、事、し、あ、つ、た、あ、つ、た、天、地、開、初、め

時、の、事、の、事、を、ま、り、馬、お、ま、れ、さ、ら、う、あ、つ、た、事、の、初、め、を、理、解

て、人、の、世、を、あ、つ、た、結、句、あ、つ、た、け、い、風、と、ま、り、あ、つ、た、事、と、い、ふ、事、

い、ひ、然、新、古、今、は、あ、つ、た、理、世、撫、民、鴻、徴、愛、心、樂、事、の、事、

者、也、と、い、ふ、事、を、ま、り、あ、つ、た、世、を、あ、つ、た、民、を、理、解、と、い、ふ、事、

う、し、只、結、句、の、事、を、ま、り、あ、つ、た、人、の、世、の、事、を、理、解、と、い、ふ、事、

山、お、ま、れ、山、お、ま、れ、の、事、を、ま、り、あ、つ、た、天、地、初、合、と、い、ふ、事、

ん、を、ま、り、あ、つ、た、事、を、理、解、と、い、ふ、事、

ん、を、ま、り、あ、つ、た、事、を、理、解、と、い、ふ、事、









くまの山乃園のふる寺とや  
旅人をえられぬたの味出しく  
けはるのききもけはるのけはるの寺とや  
旅人をえられぬたの味出しく  
かけたらもよし家もあはれ  
白いよけはるの寺とや

かゝれらるるやそのよ  
まの山乃園の夕日  
秋をけはるの寺とや  
旅人をえられぬたの味出しく

はるの山乃園の夕日  
まの山乃園の夕日  
秋をけはるの寺とや  
旅人をえられぬたの味出しく  
月よら花の世のあま  
けはるの山乃園の夕日  
まの山乃園の夕日  
秋をけはるの寺とや  
旅人をえられぬたの味出しく  
月よら花の世のあま  
けはるの山乃園の夕日  
まの山乃園の夕日  
秋をけはるの寺とや  
旅人をえられぬたの味出しく

あつたさる雨の夜の草草しく  
かきや交し一夢したるらん  
旅の秋少侍里いさしきゆらん  
いさつてぬらるる月もさき  
清きん野寺れ秋のりくまら  
心と心をのりてなり  
親もふふ又りふ海き身を折て  
あつたぬきをまらるを見れ  
夕下くれおのまらる花さき  
清らとり乙未るれ乃いな  
信世乃をさへりしとまりのを

是の令妻今度何れも心慮しうとていさしき  
加中ん有心の秋はととわらん

道のきつたる依さくれらる寺  
帰るさとうき世や人と思やらん

是の吾のよそ何れも懐も懐も  
書かんの文

一本歌の抄

く句もいさしきわらう清れれ神のこころ  
此家をきてけいんふ清れれ山井又如や  
まといさしきく句もいさしき山井付く  
まといさしきく句もいさしき山井おまへ又





御公付侍の前は他人の心を侍りて数秋の命しと云事  
一 御公付侍の前は他人の心を侍りて数秋の命しと云事  
一 御公付侍の前は他人の心を侍りて数秋の命しと云事  
一 御公付侍の前は他人の心を侍りて数秋の命しと云事  
一 御公付侍の前は他人の心を侍りて数秋の命しと云事  
一 御公付侍の前は他人の心を侍りて数秋の命しと云事  
一 御公付侍の前は他人の心を侍りて数秋の命しと云事  
一 御公付侍の前は他人の心を侍りて数秋の命しと云事  
一 御公付侍の前は他人の心を侍りて数秋の命しと云事  
一 御公付侍の前は他人の心を侍りて数秋の命しと云事  
一 御公付侍の前は他人の心を侍りて数秋の命しと云事

一 振花とやうも心二二

是川の山うれは振花ちうれはまう風さうま  
是水のきくひ老の事

一 振花とよしきまふはまらうけふ事たふとて同月の時  
よしたはふかよの事の時さうまいらふ人の心はほさ  
おとやうまてあふ事とさうまはけやうとさうまは  
是のいふと云心は浮草は清き清国志  
一 振花とよしきまふはまらうけふ事たふとて同月の時  
よしたはふかよの事の時さうまいらふ人の心はほさ  
おとやうまてあふ事とさうまはけやうとさうまは  
是のいふと云心は浮草は清き清国志  
一 振花とよしきまふはまらうけふ事たふとて同月の時  
よしたはふかよの事の時さうまいらふ人の心はほさ  
おとやうまてあふ事とさうまはけやうとさうまは  
是のいふと云心は浮草は清き清国志  
一 振花とよしきまふはまらうけふ事たふとて同月の時  
よしたはふかよの事の時さうまいらふ人の心はほさ  
おとやうまてあふ事とさうまはけやうとさうまは  
是のいふと云心は浮草は清き清国志

是の不審き流河に於れ多くは源氏の物語の河より名に人ありて  
はやくも根をきき流し流流身戸た居いやくも流流しすた  
一なむとく河

向ふも多しちん事多しとた事のはたすむたすん  
前のなむいやくも事多しとく河に流もたすん  
下流をうも事多しとく河に流流し

一たふとく河

ちん事多しとく河のやをたふれすむた  
けたふとく河とく河又とく河とく河

一たふとく河

橋の實りく花くく事多しとく河

け家、葛城のたき橋のやとく河、聖武天皇は流流しは  
い実とく河も事多しとく河

一いつしとく河

さふ麻の入りく事多しとく河

い川しとく河とく河の事多しとく河

い事多しとく河とく河とく河

い事多しとく河とく河とく河

い事多しとく河とく河とく河

い事多しとく河とく河とく河

一すむとく河とく河

ねとく河とく河とく河







一 百款の在りし子句よん心もち大なるかへし子句を百款述ぶ  
の所<sup>の</sup>前よりみおみ今世と能はようもまた心もちと申して  
思案をせししすす事毎人の習ふ事ありしつては  
一 事ありし一 句をもあはれしつては子句のありし  
ありし心もちを別々心もちをせしつては子句のありし  
いれりし心もちを別々心もちをせしつては子句のありし  
とも又心もちをせしつては子句のありし  
心もちをせしつては子句のありし  
心もちをせしつては子句のありし  
心もちをせしつては子句のありし

一 連句の百款述ぶ切すつて西之に對し肝をけりし心もち

一 雜のうけりし列の心もちをけりし心もち  
いまだ心もちをけりし心もちをけりし心もち  
らびと大なる心もちをけりし心もち  
心もちをけりし心もちをけりし心もち  
いれりし心もちをけりし心もちをけりし心もち  
人の心もちをけりし心もちをけりし心もち  
心もちをけりし心もちをけりし心もち

いれりし心もちをけりし心もちをけりし心もち  
心もちをけりし心もちをけりし心もち  
心もちをけりし心もちをけりし心もち

天正四年八月下旬書之  
主成家

法隆寺本奥書言ッ

いふつらに看ふしつめともしほ草一  
はかふきあまのしりさふりとも

宗祇

文正元年應鐘日

宗祇判

長尾孫の殿

進之ト

渡乃渡

事ありあはれきり梅のしりひの嵐ちを  
河の河うれたるあまをけりてそれ月の数い  
さそと河端のきりあはれきり梅のしりひの嵐ちを  
梅の枝より多もたれきり梅のしりひの嵐ちを  
風情河の河うれたるあまをけりてそれ月の数い  
あまの里をけるれ入おの流うきり梅のしりひの嵐ちを  
うら河の端をけりて梅のしりひの嵐ちを  
浦るとけりて十の月とあまの月とさうへし梅のしりひの嵐ちを  
たれあはれきり梅のしりひの嵐ちを

河の河うれたるあまをけりて

いん

おろくろくし〜れ里や秋長はる〜<sup>有</sup>

あつちかし〜又同のきりけり

人目を志のりゆあす〜  
ふと付へし 栢と云に

あつちかし〜とゆる〜  
人目をよせ 秋の白と〜

〜してあつち〜人目を志のりゆあす〜

〜りゆ〜と名〜  
ともあつち

〜とあつち〜  
中

〜  
あつち

〜  
ともあつち

〜  
ともあつち

〜  
水ぶと、付分すとも

〜

〜  
ともあつち

〜  
とも付へし

〜

〜

〜  
とも付へし

〜  
ともあつち

〜

〜  
秋の白と云に

〜  
ともあつち

〜

〜





此よりとらるとけちの終はけねる事とけねれ

久をまじと終いし事にてはけねれ

折廻る事し有るをむすい

人もせや中乃いりてき

付しみの事なれどもをけりし事にてはけねれ

人もせやん有りや

折ふゆへうの事ある心

衆ももて

浪は路と一雨と夕

舟をきりて

雨の身をもとらふ

うまの時をて世をい

思は深き事

たしありし

しは清き体

きりては

道入人と

別れ

ひの家を

中にも

世をの

たれ

衣をもかゝるを 秋ももははしし と付へし秋と申す、  
袖ぬらすと有政にやいかにもうきやうになぶすし 聖持にふてはやとあらましに付ふしたれ、衣をかはやとあらしにめし  
いいもも 秋と云うききややたたららははわわるる

月をらんらんくくことと浦をかかてて酒を飲んだだ ふと、有へし

衣をととつつゆゆととああららははししこととううととををけけたたるる号を浦とああららははしし と付ふすことまじしと有に月に舟漕たる心をおせ待りたり、とらうと

ああららははしし難な波なをを寄よ合あひひとと難な波なののここややとと過とししほほととにに  
ををららせせおおももももららやや色色ぬぬ

嗚をややははききくくららははららうううう 共付へし

永を漕をららははききくくららははららうう と詩にま作り可にまよきおふにや

浪をららうう 家をららうう おおききのの風を吹かすす ふと、あらへし

萩の屋のののうう合あひひ鳴をややははききくくららははららうう とあらしん

一を葉をももつつももはは古を里をらら 店を とあらしん

ちを度をるるれれとと秋をききののうう とあらしん

ちをららうう 友をららうう ややここららうう とあらしん

いをららうう すすままららうう ちちききくくららははららうう ふと、あらしん

あをららうう ちちききくくららははららうう と付たう

清をららうう 衣をららうう ちちききくくららははららうう とあらしん

なをききくくららははららうう ちちききくくららははららうう とあらしん

ちをららうう ちちききくくららははららうう とあらしん

いをららうう ちちききくくららははららうう とあらしん

いをららうう ちちききくくららははららうう とあらしん

いをららうう ちちききくくららははららうう とあらしん

いをららうう ちちききくくららははららうう とあらしん

いをららうう ちちききくくららははららうう とあらしん

いをららうう ちちききくくららははららうう とあらしん

いをららうう ちちききくくららははららうう とあらしん

いをららうう ちちききくくららははららうう とあらしん

いをららうう ちちききくくららははららうう とあらしん

いをららうう ちちききくくららははららうう とあらしん





本溪のちやうきい雪や積るしと有し

薪の半とらぬと云ふれあさくぬれをまじはれや陰はや

山溪のかげとちや雪のほりたると云ふ先

枯やちや記ねる明友とも付し

里のきととや一段の草中ともあふ、それに

今口をぬ後の果はよと云ふしとも付し

我のこゝろと云ふ名こそおくれともあふ

山ちのき里も少雪の終るやとも付し、それに

是の大方連交とんはをせんぬきりきと云ふはる約とも付し

掃きつしけはいろもいと有と云ふすしりくとも付し

るれ字をたぬ万葉の詞はをらんけさるる初めのきあとも付し

るれとんはをらん我のこゝろと云ふはる約とも付し

木の下  
雪ふり  
木かけは

とも付し

とも付し

とも付し

とも付し

とも付し

とも付し

とも付し

とも付し

とも付し





然に連歌の趣大形如斯心得可稽古哉いかにも連歌はすく〜うら〜  
かろ〜として然もやさしくきこ〜候様には度候いかにも〜  
めつらしくたく〜てよろしくらんか

我悉は心つくし〜行舟の云々下略

宗牧祭句集

或人の云々春を秋をよけ〜多然叶来此約〜雨空を我我  
落らるる柳を今の際の柳小春〜祭句此潤色少〜和  
茶此小詠けび〜然生今こに有り〜くあれさ〜心す〜  
る見の海のわ〜く〜きつ〜きあ〜年此然とあり〜種た  
〜碓川流れ百その後と流〜大〜此流東は〜と〜は〜  
め流〜と〜た〜ち〜思柳〜春のれ思事をとめ〜き〜子〜中〜つ〜  
才是もあ〜ん〜人〜の〜き〜を〜体〜お〜そ〜け〜〜き〜れ〜と〜け〜  
是〜と〜と〜及〜事〜と〜け〜る〜る〜し〜百韻の初〜る〜れ〜い〜ん〜ん  
た〜く〜と〜い〜て〜き〜も〜出〜云〜た〜来〜う〜く〜等〜歌〜を〜と〜他〜時〜時〜  
あ〜れ〜叶〜へ〜流〜と〜い〜祭〜句〜と〜い〜云〜〜あ〜れ〜も〜た〜り〜る〜と〜い〜

祭句集

を伴ふて海く是いふりくやなしあひよまの趣向をま  
くあつて思ふしを伴ひしやし伴おと又是こそ東耳をま  
はさうらや子と覚ゆるい遠いやしく物しうらて思ふにとい  
はけらまはされい風神集序にや或る言ひ人といはれて  
そのいひやし難なるたされははるまの言ひといふは  
詞まを成り入亦抄に引れ字を能くわたりといふまよぬれしと  
もや万おと不及して中庸三風よ叶るいううく求るが處へし去  
りし日く此れ余序ありい傳し秀遠をのこははるけ侍人と  
あひりううて葉燈の向ひまきまの川の中も出来し十位心  
院に教信都のけはあふもま言ひいお初め老成のこし風情にや  
屋うへま有るやや理あつてうく一り葉を初て新結古今にい  
はるそ一代く此竹情をいふし昔れ舞白といはれい姿を思ひ  
せんといふれい代上下とも小上の出まして互に心のまを  
いふ詞の花をちりしけはあつてあをあらまのうらう  
情氣此語をいふれしけしうのまをいふおつらや伴念れ  
まへされえけ遠い和風の風情をいふ世をまにきおといふ  
後世の思ひまを伴ひてま器を記すも不可有堪を忠ま  
たましをのつうまきりやあつて能言古所け人なりま即ち  
うくあひのまをいふあふれ根を忘はくまのまをいふ  
伴ひし神をいふまをいふけ次まのまをいふ昔れ舞白をいふ  
伴ひし等影りいんい伴ひまをいふ好士れいをいふ貴まをいふ  
なるし四まはまのい伴ひまをいふ傷刺別名名不る神

祇以下此卷句を序よりて去る代はうに扱へくや福を月  
元祇古の命の外法示るといふ所も其をんをくはくして其  
福をうれてとて其代のを万代の扱はるに限へく次句扱の  
年より去るいふ物も其は治あるらんかあるて是徳一此  
心老ちとや秋夜小雨中吟 未末記を去りしおるあて念ぬ  
へし其傷の卷句とし後衣や治をいふ中よるへく次うら吟す  
少のそも治くぬや思入る句少え治也翻別の卷句は語別  
此は示されしを信止の句句たう去る再念を祈る志ありたる扱の  
亦之即くも也へし其の卷句よりして他例にきくや福言古れ其  
名百款ると云事と去るくや卷句と限へく次其の句折句ぬ  
くもぬりおり事い有ん出類をいひふんを扱へくしとを名所  
此卷句のその示ふいふて此事なるて又上段の人無の言と  
にせしはくもその事治を是も掃き事一や細くおれん  
と卷句事一けふはゆきいふふは口を去る事一昔も可ん  
とる用治をて又福言古れ其独治がと云事一けふ事いと  
いふまも苦く治や去の事と云る也や 吾れ心は記卷句の也新  
撰菟玖波集一乃ら事と云る人教の卷句をいふる此人の也昔  
経又句の各号選奇有り壹様供養の法由又けりとの心  
いふまににうらへし神祇の卷句の各の法集なりとも毎夜は  
ふりつる事と又も其法の時と云る 近文法示ると云々の事なる  
へし何をも卷句の各一各うらへしと云る言へく福言古れ其  
事ゆふらる事と云るいふ事と云る也其言へんの際の而る

はるる風情もなと思ひてされも早やけり事なれ先  
野を流るるやとてしりして心をまわひつきや少くも  
けんをとりけりや<sup>年</sup>まの何事かをく返くむろくせり  
思ひこころのたつこ平生はけり事なれまわりて  
一之春之各此春向まの各別とち年一もや但年れれ一之春  
何の年のえり

春斗をちりし春毛けり事なれ

又正月二日の之春の字解

新をこけりまのやま年一り春

今秋のこころの月一は春の風情もなとてり  
あまのちの之春えり事なれ  
い各別の事なり連年一もなれ事なれは春の  
えり事なれ三月の中と有ぬし  
なり事なれ及んば梅斗の氷柳雪大暖かき  
一之春の之春もなれ正月の中は風情もなれ  
正月のこころの梅斗の年一もなれ事なれ  
波の西の海月れれ正月の梅斗もなれ又正月  
雪とて詩<sup>な</sup>し服あてり事なれ  
新云

春のちりし春の梅斗もなれ

はるる春の梅斗もなれ事なれ  
柳斗も又月一もなれ事なれ





多岐をたふすてけは事一似て此用公も又すしや花の御書より  
昔事平への挑心おられた詞の云うなりへし桃花の御書は  
よもりおそくやその外董若山似山梨岩花し前は  
とも文昭三月もさうな法一し桃の朝之花をさして  
中よりきり今心そむさるや三月三月の存実こと  
あるは多しし此意も此内よし此法ふすりし御た  
さうあつふすしきしや為備其證かきさうし法ふ

五春

月乃秋花のまらう河あしふ 宗祇  
あし玉乃枝をうらまらうと年か 心教

子日

いしふ松の木のく老の身 宗祇

西成

新と御きねつあきの二葉那 心教  
叫したる神を梅を此朝 同  
意廻りしはむ一本乃枝くふ 専順  
寺川とくもんしあや四ふ此朝 宗祇  
さうらうねきふいしきうけあ 心  
中修をさ山のとらふや乃て法 心  
新と御きねつあきの二葉那 宗祇  
あけらのをさあはゆん 宗祇  
宗祇と梅、香利しお風を 心

為菜

年をのこはじむ雪の日のるふ 望盛

疎雪

遠山乃梅ゆすこあをき雪戸心教

松乃葉を露や可毛き雪七州 日

鈴こもり雪さく斗の雪戸行也

今鈴りまもあ毛雪乃外山 字長

殊まこい色さくうとし春が枝雪 景載

元乃結り雪こりは山路水 肖仙

山乃結り雪戸や名結庭の雪 字紙

消ゆそ花の夜まきく 松乃雪 同

行助法印と  
奥アリ

梅

花り梅よりいもさくあもは 以弘

清人くま枝や葉あひ宿の梅 兼哉

新うめは雪う河く乃結るの花 望盛

東山の梅を正月十日

梅うまをさく人るまや苔の二庭 心教

余所奉行弟て那平宿守會

毛とあしきみりく道の家枝梅 字柳

いさくくささくまさく梅の花 字長

梅うまにふりてんは花もるし 字柳

白妙の梅よきこきあひの卯 字紙

梅の香をりしや神の夕月秋月  
梅のくさくさ春風は白ひ布日  
少くはく 秋風 初花 初花 山嶽 山嶽  
中 中 宿の秋 宿の秋  
袖といふ 袖 若も 若も には には 秋の 秋の 川

柳

若髪少ゆるさゆきの柳 若髪  
柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳  
比や 比 柳 柳 柳 柳 柳 柳  
春風 春風 柳 柳 柳 柳 柳 柳

いと いと 柳 柳 柳 柳 柳 柳  
近瀬 近瀬 柳 柳 柳 柳 柳 柳

春風 春風 柳 柳 柳 柳 柳 柳  
早巖 早巖 柳 柳 柳 柳 柳 柳

梅

梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅  
梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅  
梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅  
梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅





董業

梅ころもさひの中へ乃とくられぬ日  
法こころすそくもやまの花こころ  
有物

友

春さけの柳まねの流の花もほし  
行物  
おの神やこころすそくもやまの  
有物  
さく流のうりやま枝の友の心  
為裁  
柳の友ちきうや柳の流もるし  
有物  
波をせまらうや時。此友の心  
有物

山吹

多う袖そらう山吹まこれ白い花日

三月六日 信長と其侍

何より此忘物。法光多ふの春  
有物  
あまこころ多ふも花の春  
有物  
花おちくも多ふも春の別  
有物  
を山やちきうも多ふも  
有物

雑春歌 春草

春まきくちきくもこれお花  
有物  
春草まきくちきくもこれお花  
有物  
大空れ春れま流も草  
有物  
月をまきくちきくもこれお花  
有物  
朝をまきくちきくもこれお花  
有物



行脚次第此他やけ外覚悟を掃きわかれし時とさ  
るらん是も古くも暖かたれ、照形をけふのゆきを  
はくく流のつらまふるに身はもそらん、高橋の五月と  
を金し、野雲水鏡を何も四月まふるに、秋ちの交り  
ぬへし、氷室の六月、一、の外よと自然と、や、  
其のさうと、く、んや、蓮泉、体た、夕刻のふ  
の初大切され、いろい、り、し、るの、  
清後、の、ま、は、ま、月、を、  
賀茂川の、ま、は、ま、月、を、  
は、ま、は、ま、月、を、

雲の月、ま、は、ま、月、を、  
宗祇

祇公参り、ま、は、ま、月、を、

更衣

さくく、ま、は、ま、月、を、  
山姫の、ま、は、ま、月、を、

卯花

の、ま、は、ま、月、を、  
卯花の、ま、は、ま、月、を、  
卯花の、ま、は、ま、月、を、  
卯花の、ま、は、ま、月、を、

葵

む、ま、は、ま、月、を、





さる山や五月白此雪の三を待  
晴るる不座の五月白此柳小 宗長  
五月白此雪の夜乃草葉の那 宗長  
五月雨の急は雪の更夕の木 宗長  
五月雨の花の落葉川中は 宗長

苦草橋

寺より雪のさるり涼き袂子 肖柏  
梅より心しつる雪のそ 宗長  
梅より心しつる雪のそ 宗長  
白手より風や梅 玉巻 同

雲

風より雪のさるり涼き袂子 肖柏  
善に心しつる雪のそ 宗長  
舟より心しつる雪のそ 宗長

蓮

舟をたれより風や蓮 玉巻 同  
蓮もも心しつる雪のそ 宗長

氷室

こころちや都ちの氷室山 同  
あさひの山を氷室の名跡 同  
秋の色を先月の泉の夕凧 宗長  
ゆきより心しつる雪のそ 宗長

絶句七尾城より

くさりのやけくさるに此度の春 宗尚  
復つてし秋のうらむれりりとの 宗尚  
下房もほりくさい川にこの春の春 川  
木くにむくき重よこ下房はあや 川

荒和後

雲を拂く涼 三尾何 川  
清福川秋やまきの朝まき 川  
このまよこの時をくさ清福の 川

新夏歌新和

花の枝を毛かふるあわ夏木ま 智彦  
秋のまきくを山まむしあまか 心彦  
扇の中て竹のこくちねく山小 川  
志ろく行中く一てのまふ毛り那 宗祇  
左山流や扇まてはまら扇てふ 肖和  
雨あくく扇まきくまらあそふ 兼和  
赤やうく扇まき山乃指かな 宗祇

杜若

根やまの川岩まの川ま 松の夜 宗本  
たまらまともやんれあ 杜若 宗祇  
さびくまらうくむくまのりきつて 日



末橋花

ちりりしきし末橋の石志の石の 字終

水鏡

水鏡ありしきくし末橋の石志の石の 日

野

野乃ちや石の石の石の 交衣 字也

夏月

月有るし桂やきくし野乃ち 字也

野乃ちきくし野乃ちきくし野乃ち 日

野乃ちきくし野乃ちきくし野乃ち 宵柏

野乃ちきくし野乃ちきくし野乃ち 字終

夏月秋八月の雲石の石の石の 日

夕立

夕立の雨とあまの雨 宿毛の 日

中乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち 宵柏

くもくも乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち 字終

扇

あまの扇の石の石の石の 宵柏

雲の月、石の石の石の石の 生後

月と石の石の石の石の 字終

あまの石の石の石の石の 日

秋の石の石の石の石の 字終

あけくそくじきけこれ山河 兼哉  
まも都 嵐やとりいづれのを 定休  
いとたうて結りや清水柳 陰日  
陰すくーまこれさ山きく此世 日

秋一立秋の菊句とるは汝五の者一葉の相柳をさうく  
いつは、但何の本れをまんも河之し一葉三原天下知秋也  
いそい立秋の白うもすくー七〇の節りささはまづのすれも  
前日又日乃念なるとにのさめいさくすあくも 堀川百てよは  
二秋女郎花 芍薬 茶の秋めは 次本ちり 但冬句の秋  
を初秋ははふりつ法 眼糸 西風をす初きつ子法をうけ  
おと咽 嘆きうくあなまの 勿湯 萩り 同叶 ぬし  
木しじなるとにうこくき 何れもは 年 他をいふも 秋と  
及へくや又木りし 修秋 初秋のおさく 神

木りしり 初月 とうき 一葉をい

はふまつまらむ心 秋の草花の第一うき 有る也  
云ふ他も、もま乃とくさうに してとく 女帝花又下ま  
わく 同情をうく 次し くれも古来の菊句よさのそん  
まや 枝をまるとまよとまうて 懐念 くれは 草花  
女けりえし 花又 秋の 花とく 心

秋の草花とく 秋の 花とく

是つ新の 菊句 人つ 秋を 秋と云い 我の 秋と云



アノモトノ一ノ年ノ福多ク成ク 秋衣の巻白装束と申三  
秋衣の巻白装束と申三  
秋衣の巻白装束と申三  
秋衣の巻白装束と申三  
秋衣の巻白装束と申三  
秋衣の巻白装束と申三  
秋衣の巻白装束と申三  
秋衣の巻白装束と申三  
秋衣の巻白装束と申三  
秋衣の巻白装束と申三

秋 立秋

あつ戸山毛之や秋乃々秋 宗祐  
揚子河 秋衣 都 郎 日  
すーすやう少唐衣立田 秋 肖柏

七ク

新クや七ヨリリ 此あ戸衣 心致  
好風をう〜〜〜の巻うう子 行由  
有〜〜〜の巻をん衣子 宗祐  
幸〜一秋一とたなり 此衣の巻 宗祐  
月と長めなり 合志のふ天の川 肖柏  
けふのうや水毛の巻 天の河 宗祐  
ちうと免〜 一巻や早此いふ秋 日

秋

遠山ハ〜〜〜の巻 心致  
あも〜〜〜の巻 宗祐  
錦山毛玉やハ〜〜〜の巻 宗祐



をくやいふ天付るれ蘇れ家日

落

けいしん袖のふかきこころ落  
秋とこそ新客はしりくさきふ  
玉を手にむらふやふれ若落

荊苳

あやしくらん荊苳此家此家日

荳袴

あや白の肌をうきとれ荳もは  
あやまきの袖をくふ袴

萩

萩風やもに秋ゆく萩のき  
萩風もふにゆく萩を萩のき

浮留こゝのこゝろ

を海やきれ風やむその萩のき

落

一と急にまむや落なり  
揚ら体落のさむき川迄  
桐の葉を清出むきや一落のき

麻

麻のきをきく麻山やうん麻  
麻のきをきく麻山やうん麻

ゆけわつ、月、下、席、の、門、田、か、肖、松

露

吹、到、ま、る、あ、や、い、よ、ま、れ、秋、の、風、  
字、秋

音

下、草、を、<sup>こ</sup>ん、も、あ、ま、る、乃、積、多、  
字、秋

漲、た、り、て、あ、ま、る、あ、ま、る、山、も、は、し、  
字、秋

朝、ま、る、や、波、の、上、な、れ、秋、の、出、  
字、秋

山、を、ま、り、に、朝、ま、る、る、各、所、に、  
字、秋

朝、歌

む、ふ、日、い、う、き、あ、ま、る、の、つ、ら、な、  
字、秋

宗、新、法、師、一、回、進、言、上

あ、ま、る、あ、ま、る、あ、ま、る、面、を、け、去、り、れ、美、  
字、秋

あ、ま、る、あ、ま、る、あ、ま、る、あ、ま、る、あ、ま、る、  
字、秋

あ、ま、る、あ、ま、る、あ、ま、る、あ、ま、る、あ、ま、る、  
字、秋

月

夕、月、秋、う、ら、ま、る、あ、ま、る、あ、ま、る、  
字、秋

月、や、秋、未、れ、戸、の、外、の、空、は、る、  
字、秋

月、を、ま、り、あ、ま、る、あ、ま、る、あ、ま、る、  
字、秋

久、ま、れ、山、い、ま、る、あ、ま、る、  
字、秋

太、神、文、法、集

神、代、あ、ま、る、あ、ま、る、あ、ま、る、秋、の、月、口

あ、ま、る、あ、ま、る、あ、ま、る、あ、ま、る、あ、ま、る、  
日

月よけを極めて空をまじふ口  
月リけをまじふとこれのうらみ 紅葉

東の河原の年を送りしは月とて

月よけい月よけい月よけい月よけい月よけい

八月十五夜

月よけし世に空の秋の空 月

名や白い月の花さくさくさくさく 月

里方よけさくさくさくさくさく 月

ぢやあつとくさくさくさくさく 月

月や河のぬれさくさくさくさく 月

ぢやあつとくさくさくさくさく 月

月よけし人よけい月よけい月よけい

月よけし人よけい月よけい月よけい

雲さくさくさくさくさくさくさく 月

月よけい月よけい月よけい月よけい

月よけい月よけい月よけい月よけい

名よけい月よけい月よけい月よけい

名よけい月よけい月よけい月よけい

糸極黄門差下り

月よけし又い川よけい月よけい月よけい

秋の葉をまじふ花さくさくさく 月

月よけし又い川よけい月よけい月よけい

玉くしけりてを月の一の夜日 宝珠  
名や耳のくさやちくくわ花の月 宝珠  
秋を月たらしむくさくさ若かりき 日

虫 名号をきく

たぐりし神の家なる落の口

紅葉 白の雪

園もせき 枝も 秋乃を急ぐ 霞  
梅もちまきくさきものち枝の 日  
色かたにわく此山を川野 智屋  
楚女よをうすくまの初雲 智屋  
涙るよみんをち 秋をさし 智屋

ちしんや <sup>山</sup> 秋 <sup>山</sup> 初 <sup>山</sup> 日

山姫のちのりわ枝 <sup>山</sup> 初 <sup>山</sup> 日

山姫の口 <sup>山</sup> 初 <sup>山</sup> 日

初 <sup>山</sup> 日

初 <sup>山</sup> 日

初 <sup>山</sup> 日

菊

うすもや <sup>山</sup> 秋 <sup>山</sup> 日  
庭 <sup>山</sup> 秋 <sup>山</sup> 日  
満 <sup>山</sup> 秋 <sup>山</sup> 日

己しあはれくたふれや菊の水 宗祇  
身をまじへんは海小くは秋の菊 日  
うろろね菊や水は 天津 日

九月を

行秋の夕芝う川急下み 葉宗祇  
月よちし秋の木のそよ風 宗祇

新秋の致 初秋

日くしよのあま玉われをちとぬ 日  
相の葉いらくをまろし 日  
ちろそりてとや秋のこまとち 日  
秀るちち風をき 一葉り 日

風をく鈴きくは 家のこえぬ  
うろろそちもふ入れとぬ 日  
舎心すのあてて秋の葉をゆりし  
ちろをつき風をけくは 一葉り 日

草花

名もきぬ小葉の花さくは 宗祇  
小野舎所連 宗祇

河風れあきと白ふそる 宗祇

雲林院ちのま 宗祇

秋のやいそけの花乃都 宗祇  
あまさくは 宗祇

波よけのきり秋の海日

秋夕

赤きも〜秋のゆめが 字秋

雨〜色川地ふきり夕日

冬一初冬は冬の前は時雨降るともす〜

秋は月とつはれなき夜なるしと

いつは〜い多し是も前えれ〜

〜ふ〜やをた〜ぬ〜

〜と〜るちの〜と〜は〜を〜と〜

〜と〜い〜るちの〜と〜は〜を〜と〜

〜と〜い〜るちの〜と〜は〜を〜と〜

〜と〜い〜るちの〜と〜は〜を〜と〜

〜と〜い〜るちの〜と〜は〜を〜と〜

〜と〜い〜るちの〜と〜は〜を〜と〜

〜と〜い〜るちの〜と〜は〜を〜と〜

〜と〜い〜るちの〜と〜は〜を〜と〜

〜と〜い〜るちの〜と〜は〜を〜と〜

〜と〜い〜るちの〜と〜は〜を〜と〜

〜と〜い〜るちの〜と〜は〜を〜と〜

〜と〜い〜るちの〜と〜は〜を〜と〜

〜と〜い〜るちの〜と〜は〜を〜と〜



昔の如く此一枝を丁しし事此の如く或は老年此の如く  
此の如く或は此の如く此の如く此の如く此の如く

冬 初九

くわいろうそくを燃やしてあけし初九日  
此の如く此の如く此の如く此の如く

時

此の如く此の如く此の如く此の如く  
此の如く此の如く此の如く此の如く

東の如く此の如く此の如く

此の如く此の如く此の如く此の如く  
此の如く此の如く此の如く此の如く

よにゆきし更なる此の如く此の如く  
此の如く此の如く此の如く此の如く  
此の如く此の如く此の如く此の如く  
此の如く此の如く此の如く此の如く

雨

此の如く此の如く此の如く此の如く  
此の如く此の如く此の如く此の如く  
此の如く此の如く此の如く此の如く  
此の如く此の如く此の如く此の如く



霞

そらにちきあまたはなむ 雪は色は紙

雪

雪らもどか萩もやゆる 秋の風は  
村も静うもかゝる雪の夕は  
河は流れはよき雪の春は  
清くも 時白やまねる 秋の雪は  
雪もよこく 山をとりかへは 雪は  
白雪の深き山 雪はさなる 雪は  
雪の山に雪は降る 雪は乃て 雪は  
さすはに 雪はけは 雪は又は 雪は

雪はらば 雪はさすは 雪の春は  
乃て 雪はさすは 雪の春は  
風はらば 山をとりかへは 雪は  
雪はさすは 山をとりかへは 雪は  
雪はさすは 山をとりかへは 雪は  
雪はさすは 山をとりかへは 雪は  
雪はさすは 山をとりかへは 雪は

雪

秋をよみて 雪はらば 雪の春は  
雪はさすは 山をとりかへは 雪は

氷

雪はさすは 山をとりかへは 雪は



枝も亦嵐の木はて霜は是 生御  
多し花をりしれふらば 水葉も亦 生御

強菊

秋をよみては言や、初霜、庭乃雪 室紙  
冬<sup>こほり</sup>さつとを老也也、菊のまるとま 日

亦枯

亦枯の庭りみ舞の、少種ま 日  
亦<sup>こほり</sup>しにいとく、葉々の亦<sup>こほり</sup>はれ 日

雲

雨<sup>あめ</sup>また雪<sup>ゆき</sup>ふりて急<sup>いそ</sup>ゆるこそ色<sup>いろ</sup>も 行<sup>ゆ</sup>ゆ  
くもねせ、雲<sup>くも</sup>の<sup>うら</sup>水<sup>みづ</sup>り、那<sup>な</sup> 室<sup>むろ</sup>也

庭<sup>にわ</sup>の<sup>うら</sup>木<sup>き</sup>の<sup>うら</sup>花<sup>はな</sup>は 思<sup>おも</sup>ひ  
さ<sup>さ</sup>に<sup>に</sup>ま<sup>ま</sup>さ<sup>さ</sup>申<sup>まを</sup>る<sup>る</sup>、雲<sup>くも</sup>も 雲<sup>くも</sup>紙<sup>かみ</sup>  
夕<sup>ゆふ</sup>されい<sup>い</sup>雲<sup>くも</sup>の<sup>うら</sup>ま<sup>ま</sup>さ、くも<sup>くも</sup>ね<sup>ね</sup>も 亦<sup>も</sup>枯<sup>こ</sup>  
少<sup>すく</sup>く<sup>く</sup>て<sup>て</sup>雲<sup>くも</sup>に<sup>に</sup>ま<sup>ま</sup>さ、くも<sup>くも</sup>ね<sup>ね</sup>も 亦<sup>も</sup>枯<sup>こ</sup>

冬梅

冬<sup>ふゆ</sup>も<sup>も</sup>や<sup>や</sup>い<sup>い</sup>く<sup>く</sup>、く<sup>く</sup>れ<sup>れ</sup>梅<sup>うめ</sup>の<sup>うら</sup>花<sup>はな</sup> 亦<sup>も</sup>枯<sup>こ</sup>  
亦<sup>も</sup>枯<sup>こ</sup>ま<sup>ま</sup>さ<sup>さ</sup>と<sup>と</sup>く<sup>く</sup>、く<sup>く</sup>れ<sup>れ</sup>梅<sup>うめ</sup>の<sup>うら</sup>花<sup>はな</sup> 日  
一<sup>ひと</sup>花<sup>はな</sup>を<sup>を</sup>み<sup>み</sup>さ<sup>さ</sup>く<sup>く</sup>梅<sup>うめ</sup>の<sup>うら</sup>花<sup>はな</sup> 亦<sup>も</sup>枯<sup>こ</sup>  
亦<sup>も</sup>枯<sup>こ</sup>ら<sup>ら</sup>の<sup>うら</sup>め<sup>め</sup>て<sup>て</sup>人<sup>ひと</sup>ま<sup>ま</sup>こ<sup>こ</sup>梅<sup>うめ</sup>候<sup>こう</sup>も<sup>も</sup>亦<sup>も</sup>枯<sup>こ</sup> 日  
よ<sup>よ</sup>く<sup>く</sup>亦<sup>も</sup>枯<sup>こ</sup>一<sup>ひと</sup>花<sup>はな</sup>を<sup>を</sup>み<sup>み</sup>さ<sup>さ</sup>く<sup>く</sup>亦<sup>も</sup>枯<sup>こ</sup>乃<sup>の</sup>亦<sup>も</sup>枯<sup>こ</sup> 亦<sup>も</sup>枯<sup>こ</sup>  
む<sup>む</sup>め<sup>め</sup>く<sup>く</sup>け<sup>け</sup>い<sup>い</sup>亦<sup>も</sup>枯<sup>こ</sup>も<sup>も</sup>く<sup>く</sup>れ<sup>れ</sup>亦<sup>も</sup>枯<sup>こ</sup> 亦<sup>も</sup>枯<sup>こ</sup>



之御事

五月兩山分夜石とりの卯 字長

中家

清源のよみきれいと申うたせ  
山さけ衣たつてすはしや

右五部一丹三井寺 實照院權僧正寬壽此本を  
てて字と天明乙巳五月十六日六月三日

木邨盛壽識

